

長期の体験学習 米研究者が提言

福井大で意見交換会

開設2年目の福井大国際地域学部の教育内容充実に向け、米国の研究者と同学部の教員らとの意見交換会が25日、福井市の同大文京キャンパスで開かれた。招かれた米ノースイースタン大教育学習・研究推進センター長のキャシー・タカヤマさんは、長期間の体験学習の必要性を強調した。

タカヤマさんは、企業が人材に求める創造性や適応力、主体性といった能力が、大学の教育と結び付いていない点

を課題に挙げた。学習の興味を高め、夢の実現を支えるメンター(助言者)の存在や、長期間の体験学習が大学卒業後の仕事や人生に影響すると



福井大国際地域学部の教育内容充実に向け、アドバイスを
するタカヤマさん(右) 25日、
福井市の同大文京キャンパス

指摘した。

ノースイースタン大では学部生が最低6カ月間、企業などで給料をもらいながら勤務する授業を取り入れており、「学生時代から責任ある仕事を経験できるほか、企業にとっても優秀な人材を確保するメリットがある」と説明した。大学内でも、教育内容の企画などに学生が参加し、教職員と一緒にプログラムをつくるのが体験学習になると提言した。

タカヤマさんは2013年にも福井大を訪れ、教育内容についてアドバイスしている。今回は同大の学生とも交流した。(西脇和宏)